

Recommend

灰井康佑 先生が薦める、この5冊

獣医療のミライ 8

インタビューシリーズ



灰井康佑
Hai Kosuke

とがさき動物病院 院長
日本小動物外科専門医

経歴

- 2006年 酪農学園大学獣医学部卒業
- 2006年～ 戸ヶ崎動物病院勤務
- 2011年 日本小動物外科専門医レジデントプログラム参加
- 2019年 とがさき動物病院 院長
- 2020年 日本小動物外科専門医 取得



小動物の神経疾患救急治療

編著：Simon Platt, Laurent Garosi
監訳：徳力幹彦
A4判 上製 672頁 オールカラー
定価：32,450円(税込)



SURGEON BOOKS

整形外科疾患に対する
系統的検査STEPS
犬の跛行診断

著：林 慶・本阿彌宗紀
A4判 並製 192頁 動画付き
定価：17,600円(税込)

2冊セット



写真とイラストでみる 犬の臨床解剖

著：Julio Gil Garcia, Miguel Gimeno Dominguez,
Jesus Laborda Val, Javier Nuviala
監訳：武藤顕一郎
A4判 並製 572頁

図解 猫の解剖アトラス

著：Lola Hudson, William Hamilton
監訳：武藤顕一郎
A4判 並製 252頁

2冊セット定価：46,200円(税込)



SURGEON

144号 (2020年11月号)

椎間板ヘルニア

小動物外科専門誌
隔月刊 A4判 128頁
定価：7,543円(税込)

●詳しくはEDUWARD Press オンライン「獣医療のミライ」特設ページ
(https://eduard.online/lp_future_of_veterinary_medicine)をご確認ください。



灰井康佑
とがさき動物病院 院長
日本小動物外科専門医

「目の前に来たすべての動物を助けたい」
専門医取得が、臨床と教育を支える基礎に



EDUWARD Press

〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階
tel. ☎ 0120-80-1906 fax. ☎ 0120-80-1872
<https://eduard.online>

DM : 70001863

「目の前に来たすべての動物を助けたい」
 専門医取得が、臨床と教育を支える基礎に



好きこそものの上手なれ 臨床外科医への道へ、一直線

—まずは、灰井先生が獣医師を目指された経緯からお教えてください。

私は千葉県の田舎のほうの出身なんですけど、子供のころからクワガタを捕まえに行ったり、動物と遊んだりというのがすごく好きで、自然に獣医師の道を選んだような気がしています。高校時代を振り返っても、数学などの一般的な科目は苦手だったのに、生物だけはなぜか得意でした。大学受験には苦戦しましたが、入学してからの勉強はほぼすべてが興味ある分野だったからなのか、苦にならなかつたんです(笑)。

—まさしく「好きこそものの上手なれ」ですね(笑)。外科学研究室を選ばれたきっかけは？

獣医師には公務員や会社員などさまざまな働き方があると思うのですが、当時の私にとっての獣医師のイメージは「小動物を診療する町の獣医師」だけ。目指す道に少しでも早く近づこうと、大学2年目から毎年、夏休みなどに地元の動物病院でお手伝いをさせてもらっていました。その病院の先生が、「動物病院で働くなら外科ができないとね。ヘルニアの手術ぐらいはできたほうがいいよ」と仰っていたのが印象的で……。それで、素直に「そうか。ヘルニアの手術ができなければいけないのか」と、意識下に植え付けられちゃったんですかね(笑)。その一言が、外科を選ぶ後押しになりました。

—実際に外科学研究室に入って、いかがでしたか？

最初は緊張の連続でした(笑)。学生だった我々が手術のサポートに入る際も、まずは指導教官の前で、使う器具と出す順番、術式をすべて口頭でプレゼンできて初めて、器具助手に入れるという感じで……。その内容も、誰かが手取り足取り教えてくれるわけじゃないですから。今、振り返って思えば、自分で学ぶ姿勢そのものを教えていただいたのだと思っています。

治療の選択肢の幅が、外科医の本質

—大学での経験が、その後の先生の歩み方に大きく影響した部分も大きいのではないのでしょうか。

そうですね。特に私は勉強が得意ではないタイプでしたから、なおさら、「千差万別の症例がある中で、どうやったら効率的に診察できるんだろう」ということを自分で考え続けてきました。その結果、解剖をしっかり頭に入れつつ、手術が上手な先生方にたくさん見学させていただくことで自分の引き出しを増やすのが大事だと気

づいたんです。結局のところ、その症例にあった治療法をいかに選べるか、どれだけ選択肢を挙げられるかというのが、その外科医の本質だと思っています。

—現在の後進の指導でも、そうしたことを重視されているのでしょうか？

はい。外科に関して私が常に感じるのは、「みたことがないものは絶対イメージできないし、イメージできない手術はできない」ということです。ですから、若手にも色々な先生の良い手術をできる限り多くみたほうが良いと話しています。

また、若手獣医師と接していてよく思うのは、大学教育で専門分野が細分化されて一部に特化した子が増えたけれど、他分野とリンクできていない気がします。少し難しく考えすぎているんじゃないかな？と思うことが多いですね。私自身、当院の前院長である諸角元二先生からいつも、「疾患というのは、一つの問題から派生してさまざまな病態が生まれてくることが多いんだよ。疾患のストーリーをシンプルに考えなさい」と指導していただいていたのですが、そこが本当に大事だと思います。

「専門医」は臨床医としてのベース

—灰井先生は2020年度に日本小動物外科専門医を取得されました。なぜ、専門医を目指されたのでしょうか。

一番は、良い師匠に恵まれて、引っ張り上げてもらったというのが大きいですが、本当に感謝していますが、私は学生の頃からずっと、「自分の目の前に来た動物だけは、手が届く動物だけは何とかしてすべて助けあげたい」という想いが胸の中心にありました。臨床医になっても「なんとか助けたい」の一心で、外科から内科までさまざまな病気について徹底的に調べるのを繰り返し、自分が助けられなかった症例は、次に同じ症例が来たときに助けられるように書物も調べるし、技術や知識をもった先

生のところに学びに行く……。その繰り返しで積み重ねた先にあったのが「専門医」への道なのではないかなと思っています。

—実際に専門医を取得してみて、いかがですか。

資格を取得するのがゴールではなく、むしろ、外科医としてある程度の必須要素、言わばベースを網羅した段階が専門医なのだなど考えるようになりました。そのベースがあって初めて、自分が興味をもつ分野への専門的な研究を進めていけるのだし、そのベースがなければ何でも自分の得意分野にあてはめて考えてしまう危険性があることにも気づかされました。また、専門医のレジデントプログラムに参加してみて衝撃を受けたのは、指導してくださった専門医の先生方の教える姿勢でした。自分が経験した内容を後進に伝えるのがいかに大事か、教わってきた内容をどうやって教えるのか……。論文執筆の方法から手術手技に至るまで、「情報の共有の仕方、人への教え方を教えていただいているんだな」ということが、レジデントプログラムで出会った先生方からひしひし伝わってきました。実は、レジデント生活を始める前に私がかもっていた専門医の印象は、「個人的な技能の資格」だったのですが、そうではなく、「後進に情報を共有し、獣医療業界全体に貢献していくための資格なのだ」と気づかされ、身が引き締まりました。

—では、今後の先生ご自身の展望や目標についてはいかがでしょうか。

先人に積み重ねていただいた実績、そして諸角先生から引き継いだ神経外科に対して、いかに発展させられるかですね。それこそ、諸角先生が「この子はちょっと難しいよ」と仰っていたような症例の治療成績を少しでも上げたいですし、さらに言えば、今までだったら手を施してもどうにもならなかったような難しい症例をいかにして治療するか、良い状態に導くか……。ということにチャレンジして、課題を一つ一つ克服していければ嬉しいです。

—最後に、読者である臨床獣医師の皆さんに向けたメッセージをお願いします。

まずは、目の前の症例を一生懸命助けてほしいと思います。生きている動物が一番教えてくれますし、全力で助けようとして経験したことが大きな学びになるのではないのでしょうか。また、外科専門医の取得もぜひお勧めしたいです。専門医を目指す中で学ぶ姿勢が出来上がってきますし、それが今後さらに成長するための大事なベースになると思います。